

タイトル:平成30(2018)年度 教育セミナー(第14回)

日時:2018年9月13日(木)~16日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室(303)

「18世紀のオスマン朝における書物の収集・利用 —マフムト1世の設立したアヤソフィヤ図書館を中心に」

高松 洋一(AA研)

18世紀中葉のオスマン朝におけるマフムト1世の治世は、内政と外交の面で安定を実現したが、同時に首都イスタンブルをはじめとして各地で図書館設立が相次ぎ、オスマン図書館史上の黄金時代と評価されている。マフムト1世自身もイスタンブルに3つの図書館を設立したが、そのうち蔵書の質で最も重要とされるのがアヤソフィヤ図書館である。

しかし先行研究でその具体像が明らかにされたとは言い難い。どのように蔵書が形成され、また図書館が運営されたかという問いに答えるべく、スレイマニエ図書館に現存する蔵書そのもの、設立当時に作成されたカタログ、ワクフ文書を調査した。

19世紀に歴史書に分類された610点の図書を悉皆調査したところ、アラビア語の古典的な歴史書が中核をなしながら、アラビア語からの翻訳を中心にペルシア語図書の比率が高い一方で、トルコ語の史書は相対的に少なく、標準的な作品で所蔵されていないものも見受けられる。これは宮廷で利用頻度の低い図書が寄進されたことをうかがわせる。また複数巻からなる作品に欠巻が目立ち、残りの巻がトプカプ宮殿博物館図書館に所蔵されていることから、丁寧な選書が行われていない形跡がうかがわれる。

図書に残された書込みや捺印からは、宮廷や高官の寄贈をはじめとする蔵書の出所や、図書館に寄進された年代が判明する。ワクフを認証した両聖都ワクフ監察官の名から、蔵書の大半は1740年の図書館設立時に寄進されていたが、1752年に追加の寄進があったことが明らかとなり、1726年に活動開始した活版印刷所で発行された刊本の大半はようやくこの時期になって所蔵されたことが理解される。

カタログの分析からは、カタログがおそらく書誌情報を記録したカードを元に作成されたこと、カタログ完成は図書館設立の翌年であったこと、19世紀に入って大掛かりなインスペクションが行われたことが判明する。

ワクフ文書からは、図書館がアヤソフィヤ・モスク内に位置しながら、法的に全く別個のワクフとして設立され、経営的にも無関係であったこと、開館日が週3日(日、木、土、)に限られたこと、マフムト1世の存命中にワクフ財源が数次にわたり追加され、莫大な収入をもったことが明らかになる。アヤソフィヤ図書館の豊かなワクフ財源からは、図書館の運営以外に、毎年メディナの困窮者への送金が行われたほか、財務長官府の建設費用が支出されるほどであった。(1047文字)